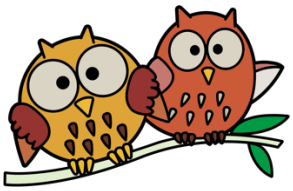
ふくろうの郷



施設長だより

令和７年４月号

「見えるもの、見えないもの」

世の中のことを全て把握することは神様でない限り無理な話なのですが、私がこの施設の把握は初めてきた時の「玄関の場所がわからない！」から始まりました。特別養護老人ホームに「地域密着型」がついたりするので、名前を覚えることも大変です。建物の存在はわかっていても中身のことは全く分かっていませんでした。

今まではこの施設について分かっていたことは「老人ホーム」「お年寄りがいる」「介護員が働いている」その程度でした。それが、施設長になると「社会福祉法人優秋会 地域密着型小規模特別養護老人ホーム ふくろうの郷」「要介護３から入所でき、ショートステイも受け入れている」「介護、調理、看護、事務がいて、介護スタッフの中には外国人も採用している」というくらいに膨らむのであります。

入所者の方達については、入所までの経緯も様々ですし、身体の状況も違い、個人に即した対応が求められ、その方に適した対応をするために介護スタッフは日々会議や引き継ぎを欠かさずに頑張っています。皆様も知っての通り、施設長は町政に関わる役割もやらせていただいておりますので、ふくろうの郷を知れば知るほど、今の自分に何ができるのだろうか、と考えることができるようになり日々学びであります。

遅くやってきた流氷も見えなくなってしまいました。私は四季によって様々な景色が見られる羅臼が小さい頃から大好きで、年齢を重ねてくるといつかこの土地を離れる日が来るのだろうか、離れられるのだろうか…と考え少しブルーになります（笑）
ふくろうの郷に入所されている方達は今はそれらの景色を眺めることも難しい状況なのですが、少しでもこの土地に居続けているという気持ちになってほしいと思い、只今羅臼の景色や生き物の写真を展示する話を進めています（７年度中に始めたいと思っています）。観光協会の方達のご協力があってこそ実現できるものなので、本当にありがたいです。可能であれば季節によって変化させていきたいとも思っておりますので、ご家族様におかれましては、面会の際にそちらも見ていただけたら嬉しいです。

米井